
君がいるだけで

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君がいるだけで

【Nコード】

N6487T

【作者名】

ごほんライス

【あらすじ】

うーん。もう少し続けようかなあと思ったけど、ひとまず投稿しておきます。続行と考えたら、少しずつ書き足していきます。

（前書き）

関係ないけど、台風はいやだなあ。

「コケコッコ」

にわとりが無遠慮にわめく朝。実にすがすがしい。うざいほどいい天気だ。

「うるせえ！」

漫画家、ポンチョ勝沼は、窓を開け、にわとりに向け、ペンを投げた。

「コケッ」

にわとりの尻に刺さり、にわとりは失神した。

「こっちは徹夜明けでくたくたなんじゃい。さあ寝るぞ」

ポンチョは床に布団を敷いた。

「では先生。急いで印刷所に持ってきます」

「あいよ。ごくろうさん。早く行け」

「先生。それでは僕、一旦家に帰ります」

「ごくろうさん。早く帰れ」

担当の焼島くんとアシのペペロンチーノくんが部屋を出て、ポンチョは、カーテンを閉め、えいやつと布団にもぐる。布団にもぐったら三秒で夢の中に入った。お。オレ、マシンガン持つてる。今日は殺し屋の夢かな。わくわくするぜ。お。あいつか。敵は。

「じゃんじゃんじゃがいもさつまいもお！」

けたたましく、ケータイが鳴る。

「うるせえなあ、もう！」

ポンチョは、夢の中でマシンガンを放り投げる。不機嫌になるポンチョ。

「もしもし。誰じゃい」

「あつポンちゃん？ あたし。華子よ」

「ああ。華子か。何の用だよ」

「ひつどーい。今日はデートでしょ」

「忘れてた！」

ポンチヨはうぜえなあと思いつつ、華子は怒ると怖いので、尻にペンを刺した。

「痛えええええ」

目が覚めた。

デートの途中眠るといけないので、元気になる注射を腕に打った（注・違法ですので、よい子のみなさんは真似しないようにしてください。するなら刑務所に入るのを覚悟してやろう。何事もリスクというのはつきものだ）

ポンチヨは、華子はファッションにうるさいから、服選びに時間がかかる。この前、ウケを狙って、バカボンのパパと同じスタイルで行ったら、怒ってセックスをさせてくれなかった。

「うーん。まあこんなもんかあ」

鏡の前でポーズをとる。ジャニーズの私服みたいな感じになってる。実に愉快さに欠けるが、セックスをするためには仕方がない。

ポンチヨは、ひげを剃り、軽く朝ごはんを食べてからアパートを出た。

いい天気である。徹夜明けのドラキュラ野郎には堪えるが、まあ元気になる注射を打ったから大丈夫だろう。

ポンチヨは口笛を吹きながら歩く。華子とは、駅前広場で待ち合わせだ。遅刻をすると、セックスさせてくれないので、寄り道しないで、まっすぐに行かねばならない。

「ちっこんな時に」

ポンチヨが前を見ると、ちびっこ売春婦が立っている。キャミソールを着て、ツインテールでなかなかかわいい子だ。小学六年生くらいだろうか。なぜ、売春婦とわかるかといえば、ポンチヨの方をじろじろ見ているからだ。

最近、不況の影響で、児童もこうして金を稼がないといけない。難儀な時代である。

「おじさん。2000円でどうですか」

「安つ。いや、そういう問題ではない。オレは犯罪はせん」

「ばれなきゃ大丈夫よう。エッチしようよう」

「そういう問題じゃない！」

ちびっこになんか手を出したら、マジで華子に殺される。

ポンチョは、ちびっこ売春婦を無視してすたすたと歩いた。

ちびっこ売春婦が追いかけてくる。

「おじさん。待ってよう」

「くそ。しつこいな」

このまま駅前広場までついてくるんじゃないやねえだろなと思って、ポンチョは焦った。

「生きたい！」

オレは捕まるわけにはいかない。児童とセックスなどすれば死刑になる。オレはまだ死ぬわけにはいかない。オレは漫画家として漫画をたくさんたくさん描いて読者を喜ばせないといけないのだ。死んでる場合じゃない。

ポンチョは必死に歩いた。

「おじさん。えーん」

後ろを振り返ると、ちびっこ売春婦が、アスファルトに座って、ひざをさすっている。ひざから血が出た。こけたのかな。

「えーん。えーん」

「ああ。もう。世話の焼ける子だな」

ポンチョはあわててちびっこ売春婦のどこまで走っていった。

ちびっこ売春婦のひざにつばをかけ、自分のシャツを破り、それでひざを巻いた。

「ひつくひつく。おじさん。ありがとう」

「ったく。気をつけなよ。かわいい顔が涙で台無しだぜ？」

「えっ。あたし、かわいい？」

ちびっこ売春婦が目潤ませている。

「勘違いするなよ。エッチはしないよ。早く家に帰りな」

「あたし、家ないの」

ちびっこ売春婦に話を聞くと、彼女の両親は交通事故で他界してしまっただけ。親戚は引き取るのをいやがった。ちびっこ売春婦の父親がやくざだったので、嫌っていたのだ。

かといって、児童養護施設は、不況の影響で子供を捨てる親が多く満員状態。

そんなわけで、今、公園にテントを張って生活してるというのだ。

「そうか……それで身体を売って生計を立てていたのか」

「あかし、もう売春なんてやりたくないな」

ポンチヨはかわいそうになってきた。

「よし。一緒に遊園地に行こう。気晴らしだ」

「えっいいの」

ポンチヨは一瞬華子に怒られるかなと思ったが、事情を話せばわかってくれるだろう。華子は頭の悪い女じゃない。

「やったね。るんるーんるーん」

「こ、こらっ腕に抱きつくな。おっぱい当たってる」

「だって、ロリ華、うれしいんだもん」

駅前広場が見えてきた。

「あっ華子だ」

華子が手を振って、その手が止まり、険しい顔つきになってるのが、遠くからでもわかる。

三人で、噴水の前に座る。

「どういふことなの、ポンちゃん」

「いやだからさ。事情を話すよ」

「おいしいな」

ロリ華は、さっき、コンビニで買ってあげたソフトクリームをおいしそうに食べてる。

「いくら、家のない子だからって、何もデートについてこさせなくても」

「いやそうはいつでもさ」

ロリ華が、二人のただならぬ雰囲気を感じ、おろおろする。

「ごめんなさい。あたし、図々しい。ちびっこ売春婦が遊園地なんて行っちゃだめよね。分をわきまえてない」

「あのっロリ華ちゃん。そういう意味じゃないのよ。あのね。そのう」

今度は華子があわてる。華子は、女性関係には厳しいが優しい女の子なのだ。

二人の様子を眺めながら、面白いなあとポンチヨは思う。

「くつくくく」

「「何がおかしいの!!」」

ポンチヨは両脇から二人にお尻をつねられた。

「痛い！」

飛び上がるポンチヨ。

噴水の水の中に落っこちてしまった。

「あーポンちゃん」

「おじさん！ 大変」

二人はあわててポンチヨを水の中から引っぱり出した。ポンチヨを寝かせる。お腹がぱんぱんだ。相当飲んだ。

「マウス・トウ・マウスしかないわね」

「えっ華子さん。やるんですか。みんな見てますよ」

「やるしかないわ。やらないと死んじゃう」

「わかりました！」

ロリ華はあわててポンチヨの唇に自分の唇を重ねた。

「こ、これ。ロリ華ちゃん。そういうことじゃないのよ。あのね。

あたしが。彼女のあたしが」

華子がロリ華に空手チョップをしてひるんだすきに、自分の唇をポンチヨの唇の重ねた。

「華子さんだけに任せておけない！」

今度はロリ華が華子に空手チョップした。

いつしか二人は火花を散らせてる。ロリ華の後ろには巨大な竜が、華子の後ろには巨大な虎が構えてる。

なぜか、ポンチヨの後ろには、桂三枝師匠が構えていた。意味がわからない。

結局、ポンチヨは、二人が殴る蹴るなどして戦ってる間に、おっさん警官にマウス・トウ・マウスされてやっと気が戻った。

「ふああ。さぶい。へーつくしょん」

「お嬢さんたち。日本刀や金属バットはしまつて、この男子を着替えさせてあげなさい」

「はい」

華子とロリ華は警官に、服を借りて、パンツをコンビニで買ってきて、駅前広場の端にあるトイレにポンチヨをつれていった。

「ポンちゃん。脱がせるよ」

「あい」

華子がびしょ濡れになったポンチヨの上着を脱がせた。

何ともメタボリックなボディ。ポンチヨは漫画家だから運動不足なのだ。

それを見て、華子はうつとりしてしまう。ちなみに、華子はでぶ専である。

すると何と、ロリ華まで目がハートになつてる。

「すてき……」

「ろ、ロリ華ちゃん。あなたひょっとして、くまのプーさん好き？」

「大好き」

「やっぱり！」

またしても、華子の後ろに巨大な虎、ロリ華の後ろに巨大な竜が現れ、火花を散らせてる。

ポンチヨと、ポンチヨの後ろにいた三枝師匠はおろおろする。めんどくせえやつらだなと、とほほほほな気分。

しかも、たちの悪いことに、華子の後ろには阪神タイガーズの選手たちがバットを構え、ロリ華の後ろには中日ドラゴンズの選手たちがバットを構え、今にも戦争が起こりそうだった。

ポンチヨの後ろでは、吉本興業の若手芸人たちと三枝師匠がおろ

おろしてる。役に立たないな！！

「じゃんじゃんじゃがいもさつまいもお！」

急にポンチヨのケータイが鳴った。

「もしもし。誰だ。この忙しい時に」

「先生！ 直木賞の受賞が決定しました！」

「うるさい！ 今はそれどころじゃない！」

実は読者には内緒にしていたが、ポンチヨは漫画以外に副業で小説も書いているのである。

ただ、こちらは、もともと、漫画原作を書く過程ではまったものであり、完全に遊びで始めたのだが、いつの間にか、百万部作家となつてしまい、漫画より収入が多くなつてしまったのが困りものだ。相変わらず、華子軍とロリ華軍の間には火花がばちばち散っている。

おつとここでCMです。

ついに出生した。業界初、五分で生える毛生え薬「もじゃくん」。定価は二万円と少し高めですが、その即効性から、大変お値打ちです。五分で夢のふさふさ人生。今すぐお申し込みを。

さて、華子とロリ華は……。

何とロリ華は顔だけロリ華で身体は竜になつて、口から火を噴いていた。

華子は顔だけ華子で身体は虎になり、ロリ華竜の身体に捕まっていた。

「あわわわわわ」

ポンチヨは腰を抜かしがたがた震える。わずかに失禁していた。後ろを振り返ると、三枝師匠と若手芸人たちはすでに逃げていた。情けない！！

ポンチヨは、警察に電話した。もうこうなつたら国家権力に委託して事態を收拾してもらうより道はない。

「ヘイ。こちらポリスメン」

「あのその。えつとあの」

ポンチョはしどろもどろになりながら一生懸命状況を説明した。

「なるほど。二股ですか」

「いやその。違いますよ。そういうんじゃないです」

「二股は立派な犯罪です。複数股禁止法違反の重要犯罪です。悪いですけど、警察は犯罪者を助けることはできません」

「そんなあ」

警察の言ってることはむちゃくちゃである。単にこの警官はモテない独身男だったので、ポンチョに嫉妬して、口から出任せを言ってるだけなのだ。

「おまわりさあん」

「うるさい。今から、将棋を山さんと差すから、オレのことは忘れる。んじゃ」

ツーツーッ。

絶体絶命である。

いつの間にか、ロリ竜と華虎は巨大化に巨大化を重ねてトイレをぶち壊し、駅前の民家や店、ビルを踏み倒し、その下では、野球選手たちが、バットで殴り合い、一般人も巻き込まれ、死体が転がっていた。

空が暗くなってきた。雨が降りそうだ。

ざああああああああああ。

ポンチョは天に向かってわめくが、天は何も答えてくれない。

ざああああああああああ。

一体なぜこんなことになった。

どこでどう間違えて、こんな異常事態になってしまった。

まるで、非正規雇用問題のようである。

非正規労働者は1985年の段階では約600万人であったが、現在は約1700万人にまで膨れ上がっている。

実に全労働人口の三分の一である。

日本に未来はあるのだろうか……！！

(後書き)

「華子」大輔華子」「ロリ華」河野夜兔」のイメージで書いています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6487t/>

君がいるだけで

2011年5月29日17時25分発行